豊かさ再考 9

輸出戦略練り直し

貿易の縮小―「小技」で活路を

金融危機に端を発する世界的な不況が深刻さを増している。新興国の経済成長も減速。貿易の縮小は避けられず、円高も急激に進んでいる。日本の輸出産業に活路はあるのか。

情報技術（IT）産業が不振に転じた二〇〇〇年春以降、日本経済のエンジン役を果たしてきたのは輸出だ。これには大幅な円安が寄与してきた。輸出相手国・地域の通貨を、貿易量や物価で調整した「実質実効レート」でみると、二〇〇七年の円相場は二〇〇〇年と比べて四割近く下落していた。

この「快適な輸出環境」は〇七年後半から逆転した。大幅な黒字を続けていた貿易収支（物価調整後の実質ベース）も、〇七年秋以降、急速に減少している。トヨタ自動車やソニーなど輸出型企業は、急ピッチで生産を縮小しており、工場閉鎖や人員削減、さらに法人市民税の減収など、国内の地域経済への影響も深刻になりそうだ。

独立行政法人・経済産業研究所の藤田昌久所長は「米国はこれ以上消費を拡大することはできない。これまで、日本の技術と中国などの安い労働力が高度に組み合わされて、東アジアが世界の生産拠点の役割を果たしてきたが、今後は輸出の構造を変えなくてはならない」と指摘する。具体策としてどのようなことが考えられるだろうか。

和傘の老舗、日吉屋では、伝統的な茶席用の傘と新製品の照明具が、同じ工房でつくられている＝京都市

■老舗の挑戦

輸出型の大企業が総崩れとなる中、これから輸出に打って出るという元気な企業が京都市内にある。和傘の老舗である日吉屋（西堀耕太郎代表、従業員六人）だ。新製品として開発した照明具「古都里（ことり）」（KOTORI）シリーズが欧州で高く評価され、同社二階の工房は「フル操業」だ。

米国の副大統領候補だったペイリン・アラスカ州知事が愛用していることで注目された、増永眼鏡（福井市）のメガネ枠は、海外からの受注残が六千本ある。米経済の混乱は逆風だが、部品点数を大幅に減らすなど軽量化した機能的なデザインには、根強い人気があり、同社の輸出比率は約30％を維持している。

高い技術や繊細なデザインに支えられ、模倣できない製品は、大量生産して市場占有率を争う必要がない。さらに、海外で高い評価を受けることで、国内で販売が伸びるという好循環も期待できる。規模は小さくても、確実な利益を生む質の高い輸出産業に育つ可能性を秘めている。

模倣できぬ技術と質 期待

経済産業省は「モノだけでなく、クール（かっこいい）ジャパンという感性の価値を売ることが大事だ」（経済産業政策局の石黒憲彦審議官）と期待しており、日本製の日用品のブランド力を高めるため、国際見本市への出展や販売促進の支援を強化する方針だ。

■民間の限界

一方、これまで輸出を主導してきた自動車や電子機器分野は戦略の練り直しを迫られている。米国の経済が回復しても以前ほどの販売は期待できないからだ。日本国内には研究・開発拠点や、高い技術が必要な部品工場を維持し、新興国向けの製品を海外工場で製造するという複雑な展開が不可欠だ。

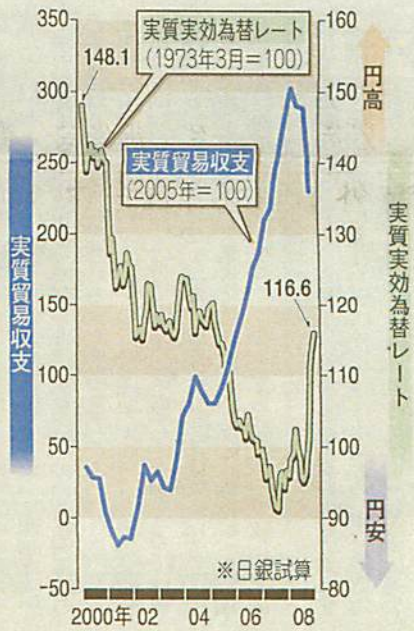
世界経済の不透明感が強まる中では、一つの輸出戦略だけで抜本的に解決できる「決め手」はない。さまざまな「小技」の組み合わせが必要だ。例えば、中国など東アジアでは、日本以上に内需拡大を求められており、港湾、道路、発電所などの基盤整備に必要な資材や技術は、日本にとって大きな輸出チャンスだ。

中小企業の輸出、研究開発、海外プロジェクトの受注環境の整備などは、短期的には利益に結び付きにくく民間部門の取り組みには限界がある。輸出戦略の面で、政府の役割は一段と重要性を増しそうだ。

（共同通信編集委員　石井勇人）

（次回は今月下旬に掲載予定）

日本の貿易収支と為替レート



和傘の「日吉屋」代表　西堀耕太郎氏

「協業」通じて新しいもの創造

和傘の需要は減少の一途。製造元は全国で十数軒しか残っていません。京和傘は、江戸時代後期に創業された当社だけです。私が五代目を継承した時には年商が百万円程度で廃業寸前でした。

和紙、竹、木を素材にするすばらしい技術を、雨具以外の製品に活用できないかと試行錯誤を重ねているうちに、ある照明デザイナーと出会い、思い切って傘の上の部分を外して筒状にしたらどうかというアイデアが浮かびました。

上部を開放することは、私たちには想像できないこと。逆に「開いたり閉じたり」という私たちの常識は、デザイナーには新鮮だったのです。コラボレーション（協業）を通じてまったく新しいものができることを実感しました。

二〇〇八年一月にパリで開かれた国際見本市に出展。デザインだけではなくて、軽くて小さくたためるなど、機能面も評価され、さらにドイツで開かれた見本市にも出展して、海外から注文が来るようになりました。

ただ日吉屋の本業は和傘です。茶席の野だて傘から、古い和傘の修理まで、どれも伝統技術と部品が必要です。「ろくろ」（傘の中枢部品）をつくれるのは、全国で長屋木工所（岐阜県岐南町）だけです。職人さんがいなくなったら、和傘も照明具もつくれません。製品を創造することで伝統技術も守れるのではないでしょうか。